

いち かわ ひろ ふみ 市 川 浩 史

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文第202号
学位授与年月日 平成15年10月9日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 日本中世の光と影「内なる三国」の思想

論文審査委員 (主査)

教授 佐藤弘夫 教授 仁平道明
教授 今泉隆雄

論文内容の要旨

序章 日本中世前夜における「内なる三国」の思想

まず、はじめに、本論文全体の方法論としての「内なる三国」の思想に関してその概略を述べる。ついで、ほぼ中世の前夜に相当する時期における「内なる三国」の思想の原初的な現われをやまと絵、『和漢朗詠集』、「入唐(宋)求法僧」の系譜、『吉備大臣入唐絵巻』を題材として予備的に考察する。

さて、本論文全体のテーマは「内なる三国」の思想である。三国とは、仏法の三国東漸に関わる三つの国、すなわち天竺、震旦そして本朝日本のことをさす。中世の対外観は概ねこの三国に規定されるが、本論文が「内なる三国」というとき、この三国を中核とした対外観であるが、即物的なそれや近代的な意味での他国理解といったものではなく、思想に内在化、内面化された対外観を意味する。つまり、おのおの思想が、この三国という歴史過程とそれに付随する問題をいかに消化して内面化したか、という点に本論文は関心をおくのである。そしてこの「内なる三国」の見方による考察が、思想史的な意義をもつとすれば、その時代の歴史的特性を十分に看取できるものであり、対象が適切に選択された場合には、すぐれた歴史叙述となり得るであろう。

「内なる三国」の思想には次のような共通の性格がある。第一に、これは仏法の三国東漸なる歴史認識に基づいているので、多分に仏教的傾向が強いということである。第二に、なんらかの形で「内なる三国」の思想に関連する思想(家)は、当然のこととして三国に代表される他国についての認識、見解を有することになるが、それと同時に、彼らは自国・日本に関する見解、意識をもつことになる、という点である。つまり、対外的関心、認識が、自国認識を促す、ということである。第三に、第二点と関連することであるが、「三国」には朝鮮が含まれないため、なんらかの朝鮮蔑視の傾向、あるいは、その裏返しとしての国粹主義的傾向が強い、ということである。そして第四に、多くの場合、歴史的、超歴史

的人格としての釈迦、そして釈迦を通して天竺という国土に対する憧憬、思慕の念が喚起されるという点である。

いわゆる「国風文化」の一環としてのやまと絵、『和漢朗詠集』を取り上げ、中世前夜の頃の人々が、身近な風景、景物を絵画に描くとき、および文学的表現として詩歌を詠むとき、その対象に即物的に対するのではなく、それらの対象たる自然の景物などが享受者の内面にいかなる意味を付与するのか、という問題関心のもとで絵画、詩歌が制作されたことを例示的に明らかにした。こうしたある種の内面的方向性は自国意識の種であったといえるものであるが、ただ美術史、文学史上にのみ位置づけられるのではなく、また限定されたある人々のあいだの精神的傾向としてでもなく、一〇世紀以降のいわゆる国風文化の問題として、ひろく時代思潮のひとつとして考えられるべきであろう。

「入唐（宋）求法僧」のうち、たとえば東大寺三論宗の奄然（？～1016）や天台宗寺門の成尋（1011～1081）の「入唐（宋）」行には、たんに彼ら自身の宗教的ないし実存的な契機のみならず、彼らの背後の東大寺なり寺門・園城寺なりの当時の寺院社会における政治的な要因がかなり大きな意味が存在していた。

本来、入唐なり入宋による求法なり巡礼なりという行為はその主体が自らの「内なる三国」の意識に基づき、積極的に三国の系譜に連なることを確認することであった。しかし、実際はそれだけではなく、当時の寺院社会をめぐる政治的な構図がそこに濃厚に反映されていたことがわかる。

おそらく一二世紀後半に制作された絵巻である『吉備大臣入唐絵巻』のストーリーは、院政期の大江匡房（1041～1111）が記録した『江談抄』所載の「吉備大臣入唐間事」の一連の説話が提供している。八世紀における吉備真備の入唐を題材とするこの説話は、つぎのような内容である。本朝を代表する知識人真備が遣唐使として入唐したが、その深い学識のゆえにかの地でさまざまないじめ、いやがらせに遭う。しかし、安倍仲磨の亡霊や「日本の仏神」の靈験により、それらの難関を乗り越え、最終的には名誉を保ったまま無事に帰国できた、というものである。この絵巻はたしかに右のように大江匡房の採集した説話を基礎にしているが、ストーリーのもつメッセージは絵巻の成立した一二世紀の所産である。つまり一二世紀後半には、吉備真備なる人物が唐と日本との対立のなかで、唐をはるかに凌駕する質を以て唐に対して有利な立場を得た、ということが鮮明にされている。さらにこの絵巻の制作にあたっては後白河院が関与していたらしいということも考慮すれば、日唐（実際には日宋）関係が貿易面で隆盛化に向かいつつあった当時の実情のもとで国家・政権の中枢部は唐に対して困難を克服して優位に立つという理想的な日本の国家像を絵巻のかたちで現出したのである。

石母田正は、古代末期の貴族は同時期の諸外国の動きなどに対して鈍感で怠惰に対応したと指摘したが、じつは、古代末期の政権、あるいはその周辺の当事者たちの対外的認識は、かかる非難を招くような体のもものではなかったのである。

以上のような方法論的な前提を確認し、予備的な考察を経たうえで第一部以下の具体的な考察に入る。

第一部 覚憲の世界

第一章 「仏法隠没・令法久住」

1173（承安三）年に覚憲（1131～1212）なる人物が、興福寺で重要な説法を行った。覚憲は、信西と藤原通憲の五男で、のちには興福寺別当にまで昇進した。この説法は弟子の筆記により『三国伝灯記』となった。この説法の主題は、仏法の三国東漸を回顧することを通じて、栄えている最後の伝来の地日本の末法真つ只中と考察されていた時代においてわが興福寺とその仏法が隠没することなく、ますます繁栄することを祈る、ということであった。

『三国伝灯記』となった説法は、承安三年八月九日、興福寺において藤原氏の祖鎌足の絵像を奉安した前で維摩経を講讃し、仏法伝来の歴史過程に説き及んだものである。興福寺は、いうまでもなく藤原氏の氏寺、維摩は始祖鎌足が比定されたものとすれば、そしてそこで語られ、祈られたことが「興法利生・令法久住」であるとすれば、その内容がきわめて具体的に「我が寺の宗法を絶えざらし」むることであったことは容易に理解される。すなわち、天竺以来、日本に至るまでの仏法伝来の歴史過程や天竺、震旦両国での仏教の様相などについて詳細に語り、論じたことは、藤原氏の始祖鎌足に、末法時において興福寺の隠没を回避し、いつそうの興行をひたすら祈ることであったわけである。いわば、壮大な三国にわたる歴史を論じ、祈りつつ、そのなかで鎌足を日本の歴史において聖徳太子にも匹敵する貢献者として位置づけ、日本それ自体が「大乘善根之界」として勝地であることが主張された。そしてその最終目的が自己の属する氏、その氏の維持する寺の末法時での存続であったことは銘記されてよいであろう。そのために、覚憲は算術を駆使して、承安三年現在が、じつは末法時ではなく（「教」「行」「証」の）「行」がまだ失われていない時とされる像法時であることを力説している。この「行」が興福寺を含む各寺院の存在、諸活動を具体的に意味していたことはいうまでもない。

第二章 覚憲と天竺

この章では、前章を承けて覚憲像に深みを加え歴史的意義に及ぶ。その際、日本勝地観と一般的にいわれる辺土小国観との関係に関心を収斂させて考察する。

藤原氏帰属意識の強かった覚憲にとって、興福寺の存亡はそのまま彼自身の存亡と重なる。その興福寺、日本が三国仏教史のなかで重要な位置を占めるとすれば、彼独自の日本勝地観と辺土小国観との関係が問題となる。じつはこの両者は覚憲において並存していたのであるが、これは、釈迦の国天竺を絶対的な高さにまで高めることで、震旦の位置を相対的に低め、結局のところ、絶対的位置の天竺の前に日本の位置を高め、強調するという操作がなされているのであった。そのことで、いわゆる辺土小国であるにも関わらず、日本は同時に「大乘善根之界」たる勝地であり得たのである。

第二部 朝鮮と三国世界の深層

第一章 神功皇后の残像

中世における日本と三国世界との関連を考える際、逆説的な意味で重要となるのが朝鮮の問題である。古代以来、朝鮮諸国（以下、朝鮮）への日本川の関わりにおいて看過できないのが、いわゆる神功皇后の説話である。神功皇后は、仲哀天皇の皇后にして応神天皇の母として知られている。「三韓征伐」なる合戦（朝鮮侵略）において武名を高めた女傑ともいべき人物像である。この「三韓征伐」説話は『日本書紀』で詳しく展開されるが、より意義深く扱うのが中世の『扶桑略記』である。そこでまず、『扶桑略記』でのこの説話の扱いとその意義、さらに蒙古襲来への対応と中核とした中世前期でのその様相について見ておきたい。

『扶桑略記』で「神功皇后条」として立項される部分は、基本的には『日本書紀』に依っているが、その条と、今は既に散逸してしまっている「仲哀天皇条」における朝鮮、具体的には新羅関係の記事は、新羅を財宝の豊かな国と見て、その財宝を擄取しようとし、さらに新羅を「異国凶賊」として「征伐」「調伏祈禱」の対象にすらしている、ということであった。そしてその過程で、神功と応神とは八幡神という神格を付与されていった。蒙古襲来のプロセスで、各地に祭られる八幡神が、大いに神威を奮った結果、日本は蒙古に勝利した、と仏教との習合を強めながら託宣のなかで宣言した。しかし、三国世界観の根底にある仏教を中核とする秩序のなかでは八幡神はなじまず、すわりが悪かった。

神功皇后説話の周辺で「三韓征伐」の対象とされた朝鮮は、はやく奈良時代の『懐風藻』から日本に対する文明紹介者として理解されている。しかし、その深い部分では、日本的華夷思想に卑賤観念が加わった意識が長く存在してきている。たとえば、朝鮮の犬戎視、病原体視などである。

このように、神功皇后は、あたかも「執拗な持続低音」（丸山真男の用語）のごとく時間を超えて中世にも、その時代にも生き続けた。それは神功皇后を通してつねに朝鮮が見え隠れしていたということの意味するのである。

第二章 「異国降伏・聖朝安穩」

朝鮮などの「異国」が世の動きのなかで現実的意味をもたらしたのが、蒙古襲来の事件であった。そしてそこで主役を演じたのが前章でとりあげた八幡神である。八幡神を祭る代表的な宮である石清水八幡宮では、この時期、『八幡愚童訓』と題される縁起が作成された。本章ではこれの検討によって「異国降伏」という祈祷の課題、さらにその結果たるべき「聖朝安穩」なる目標のもつ思想的意義を考えてみたい。

『八幡愚童訓』では、まず神功皇后の「三韓征伐」の顛末を記し、八幡神の応神は、出生時から「異国降伏」と離れがたい性格を担わされることが述べられる。さて、蒙古の襲来というときに、石清水では南都から叡尊を招聘し特別の祈祷を始めさせた。その結果、八幡神は「異国降伏」の靈験を発揮し、「聖朝安穩」が実現されたことになった。

しかし、八幡神は、不殺生戒の遵守を命じ、かつ自身は朝廷の守護神として「聖朝安穩」のための殺生を是認していたのである。

鎌倉幕府も、蒙古襲来の時、各地の寺社に対して「異国降伏」を祈祷させた。そして、すでに幕府として関東安全を祈祷の趣旨にできるほどの政治的実力を備えていたにもかかわらず、依然として祈祷の趣旨は「聖朝安穩」であり、朝廷、公家的秩序の維持こそ達成課題であった。蒙古襲来に触発された『八幡愚童訓』ははしなくも、「聖朝安穩」を核とした国家意識の一側面をあらわにした。

第三、第四章 「朝敵」 その一、その二

第二部の第一、第二章で扱ったのがいわば日本の外を見据える視点によっていたのに対し、第三、第四章では、日本の内部へのまなざしによるものとして「朝敵」を考察する。以下では、主たる対象を、保元の乱、平治の乱の際の、源氏、平家の場合、それ以降の滅亡までの平家の場合、そして承久の乱、応仁・文明の乱までの「朝敵」に限定し、しゅとして軍記を史料として用いる。

保元、平治の乱の過程で、源氏と平家とが長年ライバルであったが、そのなかで互いに朝敵になり、朝敵にされたりしてきた。つまり、相手を朝敵視すること、結果として朝恩を被るというなりゆきはきわめて相対的なことであった。

保元の乱で「朝敵」とされたのは、源為義・為朝の父子と悪左府とよばれた頼長であった。為義の子為朝は父に背いて後白河院についている。為朝は後白河院から父為義を殺すよう命じられる。為朝は後白河院に背いて朝敵となるより、父を殺して武士本来の生き方を選んだのである。こうして『保元物語』そして『平治物語』では、源氏なり平家なりの「家」代々の面目としての朝敵征伐という事業が大きな問題として浮上する。そこに、朝敵を討ち果たした者に対して与えられる朝恩が登場する。つまり、朝敵と朝恩とは対蹠的な関係にあった。朝敵を討った武士に王権から与えられるのが朝恩であり、増し加えられた朝恩の上に増長したとき、再び朝敵と化し、追討の対象となるというものである。

源・平合戦において、当初朝敵とされていた源氏の勝利へと徐々に導かれてゆくなかで平家は文字ど

おりの朝敵となった。ここで注目すべきは、王権ないし国家的秩序に敵対するだけでなく、仏神の権威—仏法・王法相依の一翼—とに違背するものであるということである。朝敵となった平家は追討の対象となった（『平家物語』）。

さて、承久の乱のとき、幕府・北条義時が院宣によって「逆臣」とされた。『承久記』ではこのことについて明確に、義時が朝敵となった由を記している。

ついで、南北朝期。代表的な朝敵である足利尊氏が登場する。この時期、天皇・王権の相対化が促進されることで、朝敵の意味が新たな展開を見せてくる。朝敵のレッテルを貼られた尊氏は、自ら光厳院の院宣を入手することで、朝敵対天皇方という図式を破壊しようとする（『太平記』）。

足利政権確立後、「朝敵」なることばの意味が変化する。すなわち、足利将軍に敵対する者が朝敵であるというのである（『難太平記』等）。

しかし、応仁・文明の乱の時期をむかえ、『応仁記』の記者は、戦乱によって京都が焼き払われた今、「諸宗悉ク絶ハテ」「仏法王法トモニ」滅亡したことを実感している。この時期の主権者である足利将軍を頂点とする政治的秩序も当然滅亡したわけであった。

第三部 鎌倉仏教と「内なる三国」

第一章 明恵の「内なる三国」

明恵（1173～1231）は、中世華嚴宗の僧で京都梶尾高山寺の中興として知られる。また、彼は熱烈な釈迦信仰の持ち主でもあり、天竺へのあくなき憧れをもち続けた。両親とも早く死に別れ、また時、空を釈迦とともにすることができなかつたことを生涯思い、ついに釈迦を父として思慕し続けて、成功はしなかつたものの渡天を計画したことはよく知られている。それは、郷里の海辺を天竺に通ずる場、そして仏国土として捉えようとするほどであった。以下、明恵の「内なる三国」の問題について、具体的には明恵が根本的なところでその制作に関与した『華嚴縁起』なる絵巻物を題材として考察する。その際、通常、三国には組み入っていない朝鮮が視界に入ってくるであろう。

『華嚴縁起』は、朝鮮における華嚴宗の祖師である元暁と義湘との求法の旅を主題として描いた絵巻物で、元暁絵と義湘絵との二巻からなる。元暁絵は、唐への求法の旅を中止した元暁が海中から発見された金剛三昧経の注釈を完成させ、王妃の病気を全快させた、というストーリーである。義湘絵は、入唐した美しい容貌の義湘が善妙なる美女の助力を得て修行を完遂し、祖国新羅でも布教を成功させた、というものであった。

この二師は明恵の祖師であった。とりわけ、義湘についていえば、明恵の相承観にとって重要である。明恵は李通玄の教学を重視した。つまり、伝統的な五祖を立てる相承説からはみ出たといえる。しかし、この義湘が五祖のうちの智儼に受法していたことから、一旦は切れた相承もこれで回復されることになった。これほど明恵は、義湘の存在を重くみていたといえる。絵では、義湘も元暁も明恵自身に似せて「美容」に描かれており、さらに義湘は自ら天竺ならぬ唐に入り、唐での動きを活写していることなどから、明恵は元暁と義湘の二人の祖師に自らを比定しようとしたのではないだろうか。

第二章 日蓮の「内なる三国」

本章は、日蓮（1222～1282）の「内なる三国」の思想の受容と展開との様相を検討することで、彼の国土に関する思想を見、それが彼の思想全体にとっていかなる意味をもっていたかについて考察する。その際、佐渡流罪以前と以後とに分ける通例に従う。佐渡以前、初期の著作である『守護国家論』では、日蓮が「東北方仏法興隆」を確信した上で、法然義への批判を強めている。つまり、本来日本では

仏法が繁栄する勝地であるはずなのに、末法の今、法然義なる悪法が蔓延している、だからこの悪法の流布を止めなければならない、と考えた。このように、この時期の日蓮の思想は「守護国家」という形で示され、観念的な主張よりも、実際に足で踏んでいるこの国土にいかにか法を根づかせるか、という問題意識を内包しつつ、仏法伝来の過程での天竺、震旦での経典翻訳の誤りなどの錯誤の指摘などによって、かなり客観的で辛辣な歴史認識を獲得していた。

佐渡期には、いわゆる三国四師なる独特な歴史および自己認識が形成された。天竺や震旦はいざ知らず、日本こそ法華経の繁栄する国土であり、像法時は伝教であったが、末法現在の日本を導く師は自分を措いてない、という自己認識に至っている。さらに、晩年の身延期では、娑婆世界、そして日本は教主釈尊の主宰する国土であるという、いわゆる釈尊御領の観念が醸成したことが知られる。日蓮による、日本、震旦、そして天竺という独自の国土の序列の大前提の上にこの釈尊御領観が熟成されたのである。

日蓮においては、最終的には日本の国土についての肯定的評価がもたらされた。三国東漸の歴史認識が出発した「内なる三国」の思想は日本にとってはこのように帰結した。

第三章 親鸞 (1173～1262) の思想について、「内なる三国」の思想の側面から考察する。この視角を親鸞に当てはめたとき、「三国」を体現したのは、三国七高僧である。そして逆説的な意味で聖徳太子も相当する。七高僧とは三国に互る竜樹以来、法然にいたる親鸞にとって相承を証しする祖師たちである。聖徳太子は、日本仏教の事実上の祖師として高く評価される。それらの存在は、浄土仏教そして親鸞自身にとって善知識であると同時に、阿弥陀仏なり釈迦なりといった超歴史的な神格としての意味ももっていた。さらに親鸞の思想においては「三国」という契機を模索するとすれば、七高僧に代表される対外的要素だけでなく、日本の内側を見つめる視点も考慮に入れる必要がある。それは彼の場合、日本の神々、つまり神祇についての観念である。したがって、本章では聖徳太子、七高僧観からはじめ、ついで神祇観に至ることにする。

行者宿報偈といわれている、1201年、親鸞二八歳の時の夢記がある。これは親鸞にとっては聖徳太子の化身とされる京都六角堂の本尊の救世観音のお告げであった。これによって親鸞は専修念仏帰入と妻帯という形での生涯を規定したのが聖徳太子であったのである。その太子は、三国仏教の中で生を繰り返しつつ、歴史を推進してきた主体であった、という。

さらに、和讃やいわゆる正信偈で表明される、竜樹以下の七高僧はさまざまなレトリックによってそのイメージは天竺に収斂されてゆく。すなわち親鸞が七高僧という相承で主張しようとしたのは、彼らが天竺に収斂される三国を通して浄土信仰を明らかに教えてきた、という点であった。

また、神祇については和讃、『教行信証』化身土巻などにより、親鸞は本来の正しい仏教を信じる者は神祇を崇拜しないものだ、そして正しい仏教信仰者は必ず神祇が守護してくれるのだ、という二つのメッセージを伝えた。しかるに、こうした神祇的秩序は三国仏教に包摂されるものであり、民族信仰的秩序を相対化することによって形成されるものであったからである。このことは「正像末和讃」において彼が描き出したト占祭祀や外教の邪義をこととしている現今の道俗の様相に対する厳しい批判、反論であったのである。

かくして、親鸞は聖徳太子、七高僧そして独自の神祇観などによる彼の「内なる三国」の思想を形成したのである。

第四章 存覚の「内なる三国」

存覚(1290~1373)は、浄土真宗の本願寺派三世を名乗った覚如の長子として生まれた。父覚如は、浄土真宗が仏光寺派や高田派などを中心に社会的に発展しようとしているなかで、祖師親鸞の「血脈」を忠実に継ぐと称する本願寺派の浮上を図った。

親鸞の「内なる三国」の思想について、聖徳太子、七高僧観および神祇観を取り上げたが、本章では、そのスケールに合わせて当該問題をやはりその神祇観をてこに考える。それは、存覚自身に関する重要問題であると同時に、南北朝期の思想史的状況を表わす現象の一つでもあったからである。つまり、祖師親鸞の思想を忠実に継承し、本願寺派を打ち出してゆく立場を当初は与えられた存覚にとって神祇の問題は、浄土真宗や浄土信仰を取り巻く政治的、社会的状況を打開するための有力な政治的手段としての意味だけでなく、彼自身にとって積極的意義をもっていたであろうからである。

存覚の著作は、彼の自発的動機によるものよりも、外部からの要請にこたえてなされたものが多い。その要請主は、仏光寺や錦織寺など、本願寺派からみれば多分に異端的傾向のつよい浄土真宗内部の派であった。したがって、存覚の思想は異端的思想と隣合わせに形成されたといえる。存覚は、念仏という宗教行為の利益や諸仏のなかでの阿弥陀仏の優位性を強調するという、親鸞や覚如の思想とは違った独自性をもっている。これは、おそらく彼の神祇への接近と無関係ではない。さらに『諸神本懐集』で、神祇を実社の神と権社の神とに二分し、民族的秩序や本地垂迹の秩序と密接な関連をもつ後者を重視し、念仏の信仰に励めば権社の神から守護が与えられる、と祖師たちからは一步踏み出した言及をした。彼の発言がけっして杜撰でなかったことは、権社の神を崇拜せよなどとは一言も述べていないことからわかる。しかし、彼の日常的な言動や念仏利益論、阿弥陀仏本仏論さらには、念仏を核とした諸宗一致論といった思想まで形成された点を考慮すれば、まぎれもなく神祇的秩序への親近感、接近を確認することができる。

しかるに、こうした思想が偶然に生み出されたものではなく、あくまでも存覚の実存をかけてなされたものであることは、祖師親鸞の著『教行信証』を客観的な姿勢で注釈しようとしたことからわかるのである。

終章 自画像が美しいか、醜いか

本論文で扱った人物群や諸思想は、「内なる三国」を通じて自国日本をみたとき、ふたつの側面を現わしていた。それは、仏教の祖国天竺を絶対的な価値の源泉とすることによる普遍的志向と、なんらかの形でわが国の特殊性に目覚め、それに愛着を示す傾向とであろう。このように、日本中世における「内なる三国」の思想は、このように矛盾に満ちながらもその一方で、天竺に直結する三国伝来なる仏教に根拠を置く普遍性への志向性をしめそうとするものであった。

論文審査結果の要旨

本論文は、「内なる三国」という独自の視点を設定し、中世人が共有していた天竺・震旦・日本からなる三国世界観を、それぞれの思想家がいかに関与し、どのように消化していったかを検討することによって、中世思想史を総体的に叙述する新たな枠組みを構築しようとしたものである。

本論文は序章の後に、本論が三部構成で展開され、終章で結ばれるという形式をとっている。

序章「日本中世前夜における「内なる三国」の思想」では、まず方法としての「内なる三国」の思想

について、その概要を提示する。天竺・震旦・日本からなる三国の観念は中世人に広く共有されたものであったが、これを対外観や他国理解の問題として捉えるのではなく、それぞれの思想家がこの観念をいかに消化し内面化したかを検討することによって、政治思想・国家意識・世界観といった諸観念を総合的に把握し叙述するための、構造的な枠組を構築することを目指す、と述べる。その上で、やまと絵や『和漢朗詠集』、さらには入宋僧などの問題をとりあげ、一〇世紀以降中世に向けて、三国意識がいかにして形成されていったかを辿っている。

第一部「覚憲の世界」は二つの章からなり、『三国伝灯記』の作者覚憲を取り上げ、その「内なる三国」の思想を探っている。

第一章「仏法隠没・令法久住」は、『三国伝灯記』が、三国間の仏法伝来の歴史を回顧することを通じて、末法においても仏法が繁栄しゆくことを証明しようとするものであったとする。その際、そこで語られる「仏法隠没」が具体的には興福寺の衰亡への危機感であり、また藤原氏の始祖である鎌足の役割が強調されるなど、随所に覚憲の属する藤原氏に引きつけた解釈がなされていることが指摘される。

第二章「覚憲と天竺」では、日本を諸国に勝れた国とする「日本勝地観」と、日本を辺境の小島と捉える「辺土小国観」が、覚憲においてどのように共存しているかを論じている。天竺を絶対的な位置にまで高める一方、それと日本との直接の関係を強調することによって、覚憲は日本を大乘仏教が広まるべき勝地であると主張した、とする。

第二部「朝鮮と三国世界の深層」は四章からなり、新羅に遠征したとされる神功皇后についての説話を主たる素材として、三国世界観とそこから抜け落ちた朝鮮の位置づけを考察している。

第一章「神功皇后の残像」では、『日本書紀』から『扶桑略記』を経て、神功皇后説話がどのように変容しつつ受容されていったかを辿るとともに、それとのかかわりにおいて朝鮮観の実態を明らかにしようとする。日本への文明の紹介者として朝鮮が捉えられる一方、根強い卑賤意識が中世においても生き続けたことを指摘する。

第二章「異国降伏・聖朝安穩」は、蒙古襲来後に著された『八幡愚童訓』を素材として、蒙古に対する危機感が高揚する時期にしきりに唱えられた「異国降伏・聖朝安穩」のスローガンが、具体的にはどのような意味内容をもつものであったかを考察する。神功皇后説話を介して八幡神が「異国降伏」の役割を担う存在と規定されていたこと、不殺生戒の遵守を求める八幡神が「聖朝安穩」のためには殺生を是認するとみなされていたこと、鎌倉幕府のいう「聖朝安穩」もまた天皇を中心とする秩序の維持を意味するものであったこと、などが指摘される。

第三・第四章「朝敵」（その一、その二）では、軍記物語を主たる史料として、保元・平治の乱から応仁・文明の乱に至る時期に、「朝敵」という言葉がどのような意味で使われたかを検討することを通じて、日本の内部にむけられた差別化の眼差しを解明しようとする。

『平家物語』においては、「朝敵」は王権に対する敵対者だけでなく、仏神の権威に敵対するものという意味が含まれていたこと、南北朝期から「天皇方対朝敵」という構図が崩れ始め、室町期には将軍に敵対するものが「朝敵」とされる例がみられるようになること、などが指摘される。

第三部「鎌倉仏教と「内なる三国」」では、いわゆる鎌倉仏教の祖師について、「内なる三国」という視点からその思想の分析が試みられる。

第一章「明恵の「内なる三国」」では、釈迦と天竺の地にあこがれ続けた明恵が、一方では『華嚴縁起』に登場する朝鮮僧、元暁と義湘をきわめて重視し、その姿に自身をなぞらえつつ、みずからの思想を形成していった様子が論じられ、その三国観受容の独自性が指摘される。

第二章「日蓮の「内なる三国」」では、日蓮における「三国四師」の観念について、その形成過程を詳

しく検討した上、その独自性と思想史的意義が検討される。日蓮においては、いわゆる「釈尊御領」観が日本一国に引きつけてイメージされることによって、辺土小国日本を中国・インドの上位に位置づける根拠となっていたとされる。

第三章「親鸞の「内なる三国」」は、聖徳太子や七高僧や神祇が親鸞の思想と「三国」との接点になっていたこと、それが親鸞の信仰の正統性を支える役割を果たしていたことを論じる。一切の仲介を排した阿弥陀仏への純粋な信仰に親鸞の独自性を見出す従来の研究に対し、親鸞思想における聖徳太子や神祇のもつ積極的意義を見出そうとする、注目すべき試みである。

第四章「存覚における「内なる三国」」では、親鸞の血縁に列なる存覚を取り上げ、三国観を中心に、親鸞の思想がいかに変容していったかが詳細に検証され、その歴史的な背景が論じられる。

終章「自画像は美しいか、醜いか」では、本論の要旨が述べられるとともに、「内なる三国」を通じて日本を見たとき、そこには常に釈迦の生まれた天竺に絶対的な価値を置く立場と、日本の特殊性を強調する立場という、相矛盾する志向のせめぎ合いが看取されることが指摘される。

論者が試みた「内なる三国」は、思想史研究の方法としてもきわめてユニークなものであり、これによって従来の新仏教中心の中世思想論では抜け落ちていた多彩な素材や論点を視野に含めることが可能になった。また、日蓮・親鸞といった著名な思想家についても、既存のイメージに修正を迫る新たな側面を描き出すことに成功している。

かかる方法については、今後さらに錬磨を重ねる余地があると考えられるものの、独自の方法に基づき大きな見通しにたつて中世思想史像の再構築を試みた本論文の成果は、斯学の発展に寄与するところ大なるものがある。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。